

日本テキスタイルデザイン協会主催  
桐生産地見学会

●女性の職業観・人生観

泣き言は止める・コピーはするな・主婦になるか、仕事に生きるかはハッキリすること。自分自身は仕事に生きてきた。主婦として子供を産み育てることは立派なこと、しかし仕事との両立は難しい。仕事に生きるのなら単なる受け手では行けない。寛斉さんの仕事を受けたのも刺繍屋としての下請的加工屋として受けたのではない。デザイナーの言う通りの事をするのではなく、刺繍家としてデザイナーは対等である。自分の仕事に誇りだけは持つこと。そして自分がその仕事をやりたいと思っている限り120%のものを出す。そうすれば必ず理解され信頼される。

- 全国を指導で回っていると、桐生の人には布地を扱っているという血が入っていると感じる。桐生には布に対して一家言持っている人がたくさんいるので是非、そういう人と膝を突き合わせて話し合ってもらいたい。これからのデザイナーは形や色だけでは出来ない。テクニックは練習すれば修得できるが、感性が大切だという。現在は作品作りに専念するためアパレル関係の仕事は引退している。
- 作品は自分の子供のようなものであり、だんだん売れなくなってきている。



大澤紀代美氏



大澤氏の講演

- 設備：●ヨコ振りの刺繍ミシン-通常、手振りの刺繍ミシン、  
振り巾=1.2・最大1.8
- 刺繍糸はパールヨット
- 刺繍メーカーは桐生に100軒 ぐらいあるが、これは  
全国で70%を占めているとのこと

■主な商材：商材という表現はふさわしくなく、作られたものは芸術作品である特に動物の作品が多く、その動物 特有の毛並みや毛の生え方などを忠実に再現することによりリアルさを表現している。「ライオン」の作品にみるように、家族の絆をテーマにしたものが多い。

■特徴：

- 誰でもできるコンピューターの刺繍ではなく、手振りは個性的でバラ付きができる。
- 氏の制作姿勢は下図は描かない。ミシンが筆で色糸が絵の具、油絵をキャンバスにいきなり描くような手法。キャンバスは全体が見られるが、刺繍の場合は30cmのワッパの中で部分々を作っていくので、全体を見ることが出来ない。その為修正することが難しく、途中で気に入らないところが出てくると破って捨ててしまうという。とても厳しい姿勢で制作している。

今回の産地見学会への参加者の多くが女性であったので、作品の紹介の他に"女性としての仕事に対する気構え"について氏の体験を交えた「仕事に生きるか・母親として生きるか」という話は参加者達に強い刺激を与えた。

今回の産地見学会の中で多くの最新機械や設備・商材を見ましたが、この大澤氏の仕事と生き方に対するお話が学生達にはもっとも心に残ったのではないのでしょうか。

(レポート 杉山 哲三)